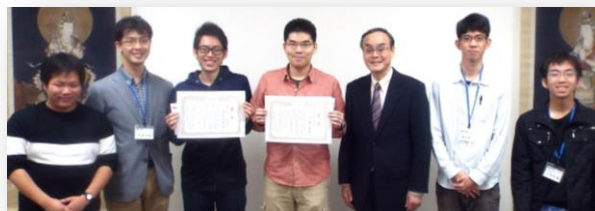


「第3回 東洋 授業への声コンクール」 特別号

学生 FD チームニュースレター

コンクール ... 「大学の授業を受けて、感じたこと」
テーマ



「第3回 東洋授業への声コンクール」を開催しました！

学生FDチームでは、東洋大学生がより主体的に学び、行動し東洋大生であることに誇りをもてる大学をめざして、授業をよりよくする取り組みを進めています。昨年度に引き続き、「第3回 東洋 授業への声コンクール」を開催しました。このコンクールは学生、教職員すべての人たちにとって大学での授業がよりよいものになるよう、広く授業への声を募集し、授業向上へ活かすことを目的としています。第3回のテーマは、「大学の授業を受けて、感じたこと」としました。

厳正なる選考の結果、今年度の入賞作品が決定しました。ご応募いただいた皆様、ありがとうございました。入賞者の方々への表彰式は、11月19日（木）に白山キャンパス8号館8階・学長室にて開催されました。

「第3回 東洋授業への声コンクール」を終えて

神田 雄一（副学長・FD推進センター長・理工学部教授）

「第3回 東洋授業への声コンクール」のテーマは「大学の授業を受けて感じたこと」でした。学生諸君から寄せられた応募作品はどれも素晴らしく、学生FDチームと教職員による合同審査会では時間をかけて様々な視点から講評を行いました。3年連続受賞の学生もあり、卒業後は教育の道へ進まれると伺いました。学生諸君が日々の講義を受けて感じている色々なことに耳を傾けながら、教員も日々の教育改善に取り組んでいきたいと考えます。最後に、ご協力いただいた多くの学生諸君、教職員の皆さまに厚く御礼申し上げます。



「学生の皆さんの授業への率直な想いに触れることができました」

齊藤 克弥（学生FDチーム代表・社会学部社会学科3年）

大学4年間は一生で一度きりの時間です。その中で受ける授業は皆さんにとってかけがえのないものとなるはずです。授業から学ぶことは知識だけではないと考えます。モノの考え方であったり、知識の使い方であったり、学ぶことは人や授業によって様々ではないでしょうか。今回のテーマで皆さんの「感じたこと」をあらゆる角度から見ることができました。学部学科・学年・性別・年齢など立場が変われば感じることも違います。学生の皆さんには、毎回の授業で「感じたこと」を常に大切にしたいと思っています。そして自分の中に「感じたこと」があれば、是非他の人と共有してみてください。またその想いを大切に、学生FDチームに届けてもらえれば幸いです。皆さんの想いが、声が、東洋大学をより良い大学へとしていきます。今後も学生の皆さんから集めた声を活動に活かしていきます。この度は応募してくださった皆様、本コンクールに協力してくださった教員、職員の方々、本当にありがとうございました。

韻文部門入賞作品

最優秀賞 「自分の視野を広げた講義」

大学の 講義を受けて 思い知る
無知な自分と 無数の知識

宮崎 智也（経済学部経済学科4年）

優秀賞 「学びに年齢は不問」

世代を越え 学ぶ好奇心 共に知る

黒瀬 貴也（社会学部第2部社会学科3年）

学生FDチームスタッフから

林 大翔（法学部企業法学科4年）

本コンクールに応募いただいた皆様、ありがとうございました。昨年度は担当スタッフとして、今年度は責任者として企画に携わりましたが、回を重ねるごとに作品の質が上がっているように感じられます。今回の企画を通して、皆さんに「大学の授業とは何か」について考えていただけたら幸いです。今年度の反省を活かし、来年度のコンクールもより良い企画にしていきます。来年度も、皆さんからのご応募をお待ちしております。

教員から

千明 誠先生（FD推進委員会教育改善対策部会長・経済学部経済学科）

今回のテーマ「大学の授業を受けて、感じたこと」から、応募作品を通じてみなさんの本学の授業に対する様々な想いを感じ取ることができました。最優秀賞の作品では、「自分の視野を広げた講義」として、大学の授業が学生の可能性を広げることに貢献するという意味で、教員から見たひとつの理想的な学びの姿が表現されています。また、優秀賞では、「学びに年齢は不問」として、イブニングコースを併設する本学の特徴でもある、多様な背景を持つ学生が共に学び刺激しあう姿が表現されています。今後も、学生の成長をサポートする「学びの場」を提供するために、学生と共にわれわれ教職員もより一層努力していきたいと思います。応募者のみなさん、ありがとうございました。

散文部門入賞作品

優秀賞 「学問は恋に似ている」

田中 まお（社会学部第2部社会学科3年）

学問は恋に似ていると思いませんか？恋をすると、もっと好きな相手のことを深く知りたくなることがあります。同じように、授業を聞いて、先生の熱意に触れるうちに、その学問に興味を持ち、より多くの知識を深めたいと思うようになります。はじめのうちは授業を受けても、知識がなくて、内容を理解することができずに一方通行。「片思い」の状態です。

しかし、レポートを作成するために図書館で文献を探しだして読み込み、文章にまとめ、何度も推敲を重ねていくと、ふと頭の中でばらばらだった知識がまとまりはじめ、点と点が線につながる瞬間があります。授業で先生がおっしゃった言葉の意味を理解するうれしい瞬間です。そして、先生の授業を通して学ぶ面白さに気付いて、学生が自ら知識を得ようと動きだしたときこそが、「両思い」になった瞬間だと思うのです。

優秀賞 「学問の徒として生きる」

泊 健一朗（社会学部第2部社会学科4年）

私が大学の授業を受けていて感動したのは、ここは学問と向き合うために、学問に関するものが集まった、まさしく“最高学府”なのだな、という点だった。大学の授業とは、実に贅沢なものだ。専門科目は、その分野の最先端を研究している先生に学ぶ。一般教養科目は、自分の学科の授業を受けているだけでは出会えない視座と合わせてくれる。ゼミでは、学問を究めんとする向き合う仲間と語り合うことができる。

大学の授業を通して、どれだけ学問と向き合っても、誰に咎められることもない。こんな恵まれた場所は大学くらいだ。翻って大学の外はどうだろうか。浅田次郎の『歩兵の本領』のなかに、ある男が自分の人生の転機で「この先の人生は散兵戦にちがいない」と考えるシーンがある。同様に、私はこの「大学」という場を出てゆくことが、散兵戦に踏み出すことにほかならない気がしている。なんとなれば、仕事に就いてしまえば、押し寄せる実務にまず注力せねばならない。仕事の中でも学問と向き合うことは可能だろうが——研究を仕事にするか、あるいは在野のまま学問と向き合い続けるか——いずれにせよ、その営みは孤独な……散兵戦になるだろう。少なくとも、毎日授業で教員の話の聴き、共に受講する仲間と語り合うような日々というものは、もう訪れない。そう考えるほど、残りの「大学の授業」一つひとつが、とても惜しく感じられる。しかし大学は、学問と向き合う姿勢を涵養する場であって、“そこ”がいくら楽しくても、それはあくまで練習期間なのだ——だからこそ、学位をもらったら卒業することになる。大学を出ても、孤独であろうとも学問に向き合うことを、学問の徒でいることを忘れてはならない。散兵戦でこそ、学徒であり続ける。それこそが、大学の授業が投げかけてくれる、学徒の本領なのではないかと、私は考える。

それを受け取れるか、そして持ち続けることができるかは、学生の側の人生なのだ。

学生FDチームスタッフから

清水 滉太（社会学部メディアコミュニケーション学科4年）

本コンクールに参加頂きました皆様ありがとうございました。私は今回、コンクール担当スタッフとして関わらせて頂きました。選考会議にも参加し、応募作品を審査しました。どの作品も授業を受講して感じた思いを、作品に込められていたと思います。座談会では受賞された方とお話し、授業への取り組む姿勢を改めて考えさせられた気がします。今回の反省等を踏まえ、次回のコンクールが今回以上に素晴らしいものになればと思います。

教員から

長谷川 勝久先生（FD推進委員会授業評価手法検討部会長・文学部教育学科）

散文部門の最優秀作品は、最初は知識不足が故に興味がなかったことが、深く学んでいく内に、知識と知識が結びつき、学ぶおもしろさに気付く、能動的に学び始める様子を恋に例えて書かれている点が高く評価された。優秀作品は、深い学びができるのは学生時代であり、その時間をどう学問と向き合うかを考えさせる点が評価された。韻文部門の最優秀作品は、散文部門の最優秀作品と同じ観点が評価された。優秀作品は、学びに年齢は不問であり、世代を超えて学びあう中で好奇心が芽生えていくという点が評価された。特別賞入賞作品は、自らが選んだ道を勇往邁進していく学生生活が表現されていた点がよかった。学生FDチーム賞は、授業で培った力を社会に貢献できる人材になるためには、感動を成長に変えていく不断の努力が大切であるとのメッセージが伝わる作品だった。いずれの作品も、学生の視点から授業を受けた率直な思いが表現されており、このような学生の期待に応えることができる授業づくりを目指していきたい。

特別賞入賞作品

FD推進センター長賞 「自分色の学生生活」

伊藤 智輝（文学部第2部日本文学文化学科4年）

自らが 選んだ色に 囲まれて 勇往邁進 悔いはなし

学生FDチーム賞 「夢の欠片はすぐそばに」

和泉 亮哉（文学部英米文学科4年）

四年間の授業を振り返ると、私の大学生活はあまたの感動と成長に彩られてきた。殊に教師という夢の実現に向けて、私を成長させてくれたのは「教職実践演習」である。

この授業では毎回数名の学生が模擬授業を実施し、先生と参観者からのフィードバックがある。よって実施者は自分の成果や反省について即時確認ができる。参観者も「この模擬授業は自分だったらどうするか」「もっと効果的な発問はないか」など他者の模擬授業を自分の課題として捉えることで、新たな気付きや学びが得られる。他者から得た感動を自分なりにデザインすることが成長につながるのである。

また、教える側に立つと視野が広がり、全ての授業に対する見方が変わる。「教師としての立ち振る舞い」という視点から考えると、「この指示や教え方は真似したい」「この活動を自らの授業でも取り入れたい」など先生方の教え方、指示、など一挙一動が学びの萌芽となる。この大きな発見は、あらゆる授業に学びの可能性を見出したという点で、私にとって大きな感動であった。

教職は魅力も多いが、厳しさ故に道半ばでの離脱者も少なからず存在する。だからこそ、四年次の教職実践演習まで残った仲間同士には固い絆がある。お互いの助言、協力的な課題への取り組み、時に授業外での交流も含めて、一人では成しえない学びあいである。共に成長し、共に高めあえる仲間との出会いは、ヴィゴツキーの言葉を借りれば「発達最近接領域」の拡大に他ならない。こうした仲間との出会いは成長の糧となり、生涯の財産である。

授業で培った諸学の基礎を発揮し、社会に貢献できる人材になるためには、感動を成長に変えていく不断努力が不可欠である。気付き、驚きといった感動の積み重ねは成長につながり、夢の欠片となるだろう。成長と感動の発見は、視点の捉え方次第で広げることも狭めることもできる。全ての授業において、感動と成長はすぐそこにあるのだから。

学生FDチームスタッフから

上地 冬哉（経済学部経済学科1年）

本コンクールを通して、応募者から授業に対して、あるいは学びについて様々な声を聞き、どのように感じているのかを知ることができて良かったです。韻文部門の短歌や川柳といった文字数が限られているもので、自分が学びや大学生活に対して感じていることを表すことは難しいことだと思います。しかし、応募して下さった方々の作品はどれもが表し方が巧みで、甲乙つけがたい作品ばかりでした。

4年間という長いようで短い大学生活の中で、より多くの学生がこれら作品のように学びや授業といったものに対して、興味や関心を持ってくれたら良いなと思いました。

学生FDチームスタッフから

清水 彩可（法学部第2部法律学科1年）

応募作品1つ1つに、「授業」という学びの在り方や「大学」という生活の場など、応募者の思いがたくさん詰まっていて、素晴らしいものばかりでした。本コンクールを通して、「授業」や「大学」での在り方などを、今一度、考えるきっかけになればと思います。そして、少しでも多くの学生の方に、より一層充実した大学生活を過ごしてほしいと思っています。

学生FDチームニュースレター 2016・3 No.8

（「第3回 東洋 授業への声コンクール」特別号）

平成28(2016)年3月19日 編集・発行：東洋大学 FD推進センター学生FDチーム

E-mail: mlstudentfd@toyo.jp

学生FD活動ホームページ: <http://www.toyo.ac.jp/fd/fd-student.html>